

紅赤～山田いちと針ヶ谷の風景～



浦和郷土文化会会員
さいたま市浦和区針ヶ谷在住

の な か み え こ
野中味恵子

「紅赤」は、昭和初期に西の「源氏」に対し東の「紅赤」と言われ、日本の二大品種となったサツマイモの品種である。そして山田いちは、「紅赤」を明治31年に発見し、その普及に尽力し、その功績が讃えられ、昭和6年に女性としては初めて「富民賞」を受賞した人である（図1）。

針ヶ谷の原風景

いち は、文久3年（1863）足立郡木崎領針ヶ谷村（現・埼玉県さいたま市浦和区北浦和）の豊職の三姉妹の長女として生まれた。

針ヶ谷村には南北に中山道が通り、明治初期には道の両側にかや葺き屋根の続く、人口が500人前後の小さな集落であった。南方に位置する浦和宿は、針ヶ谷村にとっては「町」の存在で、近代においては県庁所在地となり、洋風の行政関係の建物と出し衦造りや蔵造りの商店が混在する町であった。また師範学校や女学校の洋風校舎なども近代浦和の風景として大切な位置づけにある。

明治16年（1883）に日本鉄道線第1区上野一熊谷間が開通し浦和駅が開業するが、これによって針ヶ谷村も南北に鉄道が通り線路を挟んで東西に分断された。浦和宿か

ら針ヶ谷村にかけて中山道沿いには文化元年（1804）に植え付けられた松並木が1km余り続いていたが、これも鉄道が通ることにより一定区間伐採を余儀なくされた。しかしこの松並木は大正時代頃までは浦和の名勝とされ絵葉書にもなる風景だったのである。これらを除けば、針ヶ谷村（明治22年に木崎村針ヶ谷となる）は昭和の初めまでは、実にのどかな農村地帯であった。

その風景を紹介すると、中山道は大宮台地の一番高いところを通り、東西へ行くほどに低地となる。東の低地からは湧水が出て、フナやウナギも獲れる天王川という小川が流れていた。天王川周辺のわずかな低地周辺は田下駄^{たげた}で粃を撒くような深田があり、台地に上ると所々に雑木林や松林が続き、稲荷山、天王山、三郎山（針ヶ谷三山といわれた）という丘もあった。開墾された畑には主にサツマイモと麦が輪作されていた（図2）。

いちと赤イモ

いち は、12歳で父親を亡くしたため母親のげんと一緒に、二人の妹を養うため畑仕事を始めた。18歳で近くの篤農家四男の啓次郎を婿に迎え、啓次郎は豊職を継いだ。このころ働き者で研究熱心ないち は、サツ



図1 山田いちの肖像（山田精一氏所蔵）

マイモの栽培が上手であった。この当時、浦和あたりで栽培されていたサツマイモは、「青づる」と「赤づる」の二品種が主だった。いちの良い種イモから良い苗、良い苗から良いイモができるという考えを持ち、毎年一番良いイモを種イモに選んだ。後に

いち自身が「物に凝り性で稲なども種にするものは一々穂から粒のそろった良いものだけを選びだして播種する。」（『東京日日新聞』）と話している。

明治29年（1896）、いち33歳の時、木崎村上木崎（現・さいたま市浦和区上木崎）の市川平一郎から「八つ房」の種イモを少しだけ譲り受けた。「八つ房」という品種はすでにどこにもない幻のイモで、形は紡錘で、皮色は淡紅、肉色は淡黄であったという。それを年々栽培し明治31年（1898）には藍草^{あいぐさ}を作っていた跡地に苗を植えたところ、10月収穫にあたり7株の色の紅い甘藷を発見したのである。いちはこの時発見した赤イモ（のちの「紅赤」）の中で良いイモをすべて種イモにし、屋敷内に小さなム口をつくって種イモをゴボウの葉に包んで囲った。この時のことをいちが、「甘藷の改良も発見した薯が余り珍しいので試

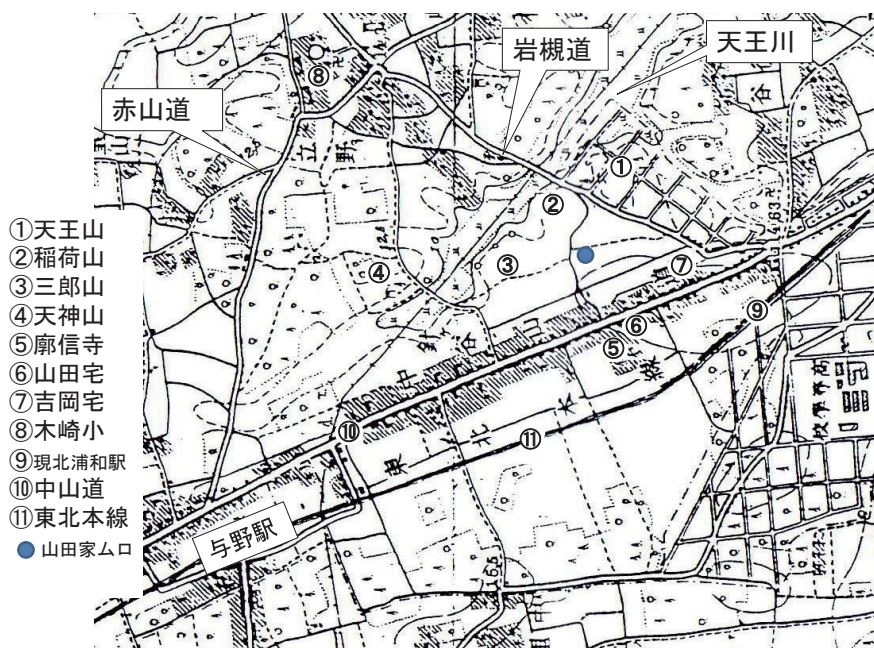


図2 針ヶ谷の原風景

資料：国土地理院『迅速測図』大正13年測量図引用

作してみた。学問がないので理屈でなく実際から毎年丹念に改良していった。」と言っている。

翌32年3月苗床にふせて栽培したところ同じ色の紅い甘藷を約1俵収穫した。明治33年にはこの1俵の収穫した赤イモをすべて種イモにして栽培した。そして10月に収穫した赤イモを初めて蕨町わらびまちの問屋であった八百太郎に少しばかり見本品として出荷したところ、最初はあまり赤いので気味悪く思われ、紅でも塗ったのではないかという人もあり、甘藷問屋でも信用してくれなかったが、すぐに非常な好評を得たという。赤イモは火の通りが早く、中は黄色で粒子が細かく上品であった。味は甘くほくほくとしておいしかった。その後いちは、赤イモの畑を次々に増やしていくが、それと同時に苗や種イモを欲しい人には分けてあげたそうである。また夫の啓次郎が畳職として出張の度に種イモを望まれ分けたため「紅赤」は普及していったという。

三喜蔵による紅赤の普及

明治33年、いちは、甥にあたる篤農家で甘藷の新貯蔵法を発見し甘藷の研究家として知られていた吉岡三喜蔵よしおか み き ぞうにも4俵の赤イモを譲った。三喜蔵はそれをもとに栽培し収穫を得たので、東京市の駒込市場の問屋であった松鉄へ試みに出荷すると、非常な好評を博した。これが東京での普及の第一歩であり、全国的普及の口火となった。

その後4年間継続して増殖と品種改良を進めた結果、優秀な成績を収めたので「紅赤」と名付けた。同時に苗を全国に売り出した。また三喜蔵は、いちへの種イモ・種苗希望者に応じきれないのを引き受け分譲

した。三喜蔵は、とても仕事熱心で研究心旺盛な人だったという。朝早く起き、屋敷内にあった苗床の見回りから始め、夜は葦あし簾すだれのようなものを苗床にかぶせ霜除けにしていた。苗は1尺位になると切って束にする。1束は100本であった。それを長野、東京、島根等々に発送していたそうである。また三喜蔵は「紅赤」の改良普及に努力を重ね品評会・展覧会等に出品して数々の表彰を受けたという。

三喜蔵は一般農家の利益と農業の改良、発達のために独占的利益を排して種イモの値段を普通相場で売り出したばかりでなく、旅行の際、車中で未知の人にも知らせ、また機会あるごとにこれを無償で広く全国的に配布したことで農家全体の利益を思う精神がさらに紅赤を普及させた。吉岡三喜蔵の「紅赤」普及における功績は大である。

やがて「紅赤」は、“サツマイモの女王”と呼ばれるようになった。

富民賞を受賞

大正11年（1922）いち59歳のとき、木崎村農会で、「紅赤」の発見者として表彰され、昭和5年（1930）北足立郡の品評会で郡農会長より特別賞を受賞した。昭和6年10月1日いち68歳のとき、財団法人富民協会から「富民賞」を受賞した。昭和6年9月30日の『東京日日新聞』には、「富民協会の富民賞表彰は、従来学術的功勞に対しては表彰の途が開かれていたが、新品種の発見、改良、普及などの農事の実際上の功勞者は全く等閑視されていたが、富民協会が初めて出したもので、学会に匹敵する農会最高の名譽賞で、山田いち氏が女性の身で全国五指の農事功勞者のうちに加わって最高賞



図3 1931年（昭和6年）10月1日（財）富民協会より
山田いちに贈られた富民賞の表彰状（山田精一氏所蔵）

をえたことは本県にとってもなによりの名誉である。」と記されている。同月6日、埼玉会館において埼玉県知事をはじめ農事関係者らと座談会に出席し、12月18日、県知事室において「富民賞」の表彰状と金盃が贈られた（図3）。

昭和7年、いち69歳のとき三喜蔵とともに北足立郡農会から表彰を受けた。

「富民賞」表彰状

副食物トシテノ甘藷中品質食味共ニ最モ優良ニシテ而モ全国的ニ普及シツツアルハ紅赤種トス即チ栽培反別ニ於テ全國一ノ千葉縣ニ於ケル千葉赤初メ或ハ茨城縣ノ茨城赤神奈川縣ノ高座赤埼玉縣ノ紅赤埼一號ナド何レモコノ紅赤種ニ外ナラズ而シテコノ種ハ遠ク明治卅一年貴方ガ在来種ハッ房ナル種芋ヨリ鮮紅色ノ一株ヲ発見シコレヲ栽培育成シタルニ創マル今ヤ煮食用トシテ市場ニ歡迎セラレ聲價愈高ク販路益々弘シ仍テ本協會ハ富民賞表彰規定第二條第一項ニ依リ理事會の決議ヲ以テ茲ニ金盃ヲ贈呈シ功績ヲ表彰ス

昭和六年十月一日

財団法人富民協會理事長勲二等 本山彦一

紅赤の普及とその後

甘藷は、明治末期から昭和の初期まで北足立郡において米、麦等穀類生産物に次ぐ主要農産品であった。大正11、12年頃には年産額が約1,586万貫余、年価格約265万円余に達し、「米麦に重ぐ重要作物として目せられる」（北足立郡誌）といわれた。そしてその主要品種は「紅赤」であった。“さつまいの女王”「紅赤」は、日露戦争後、埼玉県の特産品として関東、東北、東海、北海道方面に販路を広めたが、改良種として神奈川県「高座赤」、千葉県「千葉赤」、茨城県の「茨城赤」、山梨県の「甲府赤」等の「紅赤」種を生んだ。「千葉赤」は明治35、36年頃、三喜蔵の家に入出入りしていた千葉のあさり屋に分けてあげたのがもとだそうである。埼玉県でも大正13年、県農業試験場の改良による「紅赤埼1号」が選抜・育成され、県内外に普及し、その後、

埼玉県は甘藷作付の90%余りが「紅赤」によって占められた時期もある。全国的にも昭和9年の農林省の調査で全国の甘藷品種のうち35%を占め、同時に全国甘藷栽培面積の20%を占めたという。しかしこのころからサツマイモの品種も増えていく。「紅赤」は品質においては優れていたが、収量が少なく、また貯蔵に難点があったため、その後第二次世界大戦下の食糧難の中で、栽培面積が減少するに至る。

その後の針ヶ谷の風景

木崎村は、昭和7年に浦和町と合併し昭和9年には浦和市制が施行され、針ヶ谷は浦和市針ヶ谷となる。このころ浦和町に続き針ヶ谷も耕地整理がなされた。針ヶ谷の地域はすべて区画整理をし、針ヶ谷三山と言われた、天王山、稲荷山、三郎山も削られ低地の埋め立てに使われた。深田は畑に造成され、それを地権者が負担し、稲荷山

は整地され、学校用地（後の北浦和小学校）として旧浦和市に買収された。それらの資金を寄付金として鉄道省に提供し、北浦和駅の開設（昭和11年）に繋がったとされている。この耕地整理により、針ヶ谷は南北に二分され南部は駅名から生まれた北浦和という町となり、北部は針ヶ谷という名を引き継いだ（図4）。

かつてあった耕作地には徐々に住宅や商店が立ち並ぶようになり、いちの住む北浦和は、にぎやかな町へと変貌を遂げて行った。町の風景も様変わりした昭和13年（1938）、山田いち、その人生を終えた。75歳であった。同年、吉岡三喜蔵も55歳で亡くなっている。どちらも^{かくしんじ}廓信寺（さいたま市浦和区北浦和）に葬られた。その廓信寺の門前には、紅赤100年を記念して平成10年9月に「紅赤」発見と山田いち・吉岡三喜蔵の功績を紹介した説明板が建てられ、当時の様子を知ることができる。



図4 針ヶ谷の耕地整理後
資料：『浦和市全地図』埼玉県行政文書 昭5704「昭和13年度 市町村財務」

紅赤の現在

「紅赤」は天ぷら、きんとん、ふかしイモ、大学イモに美味しく、今でも根強いファンを持つ。現在さいたま市でも紅赤研究会(さいたま市の依頼により、農家の協力)により、さいたま市中央区鈴谷、西区中釘、見沼区大和田、蓮沼、中川、緑区大崎、桜区大久保地区において栽培されている(図5)。また、さいたま市内では「紅赤」を使っ



図5 さいたま市見沼たんぼ・中川の紅赤栽培風景
平成25年7月28日

たお菓子(招きうさぎ、浦和が一番、紅赤プリン)や焼酎(さいの紅)も作られている(図6)。

まとめ

サツマイモの品種が「青づる」、「赤づる」が主だった時代、貴重な「八つ房」を上木崎の市川家から譲られたいちだが、その感謝の気持ちと日頃からの研究心と勤勉さが「サツマイモの女王」といわれた「紅赤」の発見に繋がり、ひたむきに良いイモを作ろうという謙虚さと他の農家の人にも苗や種イモを無償で分けるという優しさが、このように「紅赤」を全国に普及させたのであろう。

「富民協会からの表彰、それも全国5人のうちに加えられるなどは全く飛んでもないことでございます。ただ、ほんの見つけたというだけでございます。」(『東京日日新聞』)といちは語っている。 いちの家族



図6 紅赤を使ったさいたま市の商品(お菓子と焼酎)

は、この業績と栄誉を決して自慢することなく、聞くところによれば、いちの孫の三治は、いちの業績を学校の先生から聞いて初めて知ったそうである。

江戸末期に生まれ近代を生きた山田いちが愛した針ヶ谷の原風景は、昭和初期の耕地整理によってすっかり変貌をとげた。偶然にもちょうどその頃が「紅赤」のピークで、いちが生きた時代は終わったのであるが、郷土にとって、いちと「紅赤」は近代という時代を象徴する女性であり農産物であることは間違いない。

今後も「紅赤」の栽培が続き、秋の収穫をより多くの人々が味わえることを願うとともに、ここに山田いちの功績を称え、結びとしたい。

参考文献

『浦和市史』通史編Ⅲ。『浦和市史』第3巻近世史料編。『浦和市史』第4巻近代史料編Ⅱ。『紅赤の100年』紅赤百年記念誌編集委員会。『浦和のあゆみ』。『北浦和発展史』松本正一。『角川日本地名大辞典』11埼玉県。『東京日日新聞』（昭和6年9月30日）。